

遺伝と感応

——大泉黒石の『血と霊』——

1

一九二三年の春、日活向島の脚本部に入った大泉黒石は、さつそく第一作となる映画作品の準備に入った。脚本部所属とはいっても映画シナリオを執筆した経験のない黒石が用意したのは原作となる小説で、以前に発表した作品と合わせて作品集『血と霊』（春秋社）が刊行されたのは七月のことであつた。¹

当時の新聞広告を見ると、

霊の生活は血の中にとありと旧約聖書にある。玄怪幽奇を擅にして、よく独のホフマンを偲ばしむるは、材を長崎及び支那に取つた著者の小説であるが、今長篇新作に旧作若干を加へて本書が成つた。日活会社はこれを脚色し、日本最初の表現派映画劇として撮影中のところ、この程漸く竣成したから、本書の市場に出づると前後して封切になるであらう。両々対観して新興芸術の生命に接触さるるを希望する。（「東京朝日新聞」一九二三・七・一五）

中 沢 弥

という文章が添えられている。言葉づかいは硬いが、小説と映画を並べて相乗効果を図るという手法は、今日に通じるものがある。映画会社にしても小説家をスタッフに迎えることは、その読者を観客の中に取り込むとともに、すでに成熟している小説―出版機構の中に映画を位置づける手段として最良のものであったろう。特に映画会社の中でも旧弊なシステムからの脱皮を必要としていた日活としては、脚本部の強化は重要な課題であった。

しかし、広告では本の刊行と前後して封切られるだろうとされた溝口健二監督の映画「血と霊」は、日本初の表現主義映画としてファンの期待を集めながらもなかなか公開されず、日の目を見たのは関東大震災後の十一月になってのことだった。すでに震災によって甚大な被害を受けた撮影所から黒石が離れた後であり、したがって第二作として予定されていた「絨氈商人」も映画化されないままに終わった。

こうして黒石が映画会社と直接関わって残した作品はたった一作に終わってしまう。しかもそのフィルムの行方は不明であり、残念ながら黒石が映画と接触することによって生み出されたその結果について我々は直接検証することはできない。映画公開当時の批評などを別とすると、目の前にあるのは一冊の書物――作品集『血と霊』だけなのである。

2

作品集『血と霊』の新聞広告には、「材を長崎及び支那に取つた」小説という説明があった。確かに単行本のタイトルともなっている「血と霊」は長崎を舞台にし、その猟奇的な物語には中国大陸での出来事が関わっている。しかし作品集全体で見ると、収録作品には長崎を舞台としていないものも多いし、必ずしも「玄怪幽奇」をテーマとしているわけでもない。曾呂利新左衛門が登場する「犬儒哲学者」などの時代物や、児童向けの映画のための作品と断り書きのあ

るメルヘン「赤い船」といった作品も収録されている。そうした多様性は、黒石が映画の中で表現しようとしたテーマの広さを物語つてもいるだろう。だが結果として、映画化された「血と霊」および第二作として予定されていた「絨氈商人」、そして旧作の「黄夫人の手」のように、主要舞台を長崎にとつた怪奇的な作品が集の中心を占めていると見なされるのは当然のことでもある。これらの作品は「血と霊」がそうであったように、いずれも猟奇的・怪奇的な犯罪を扱つていて、明らかにドイツ表現主義映画の「カリガリ博士」を意識して作品集に集められたのであろう。映画「血と霊」同様、他の作品も事情が許せば「カリガリ博士」のような傾いたり歪んだりした表現主義風のセットによつて映画化されていたことが予想される。いわば表現主義風のセットを違和感無く取り入れられる街として長崎が舞台に指定されているのである。それは、「血と霊」と「絨氈商人」の二作品が外国小説の翻案であり、舞台を長崎に持ってきたのは黒石の意図的な行為であつたことからとも言えよう。広告文にホフマンの名前が出てくるように、「血と霊」は、ホフマンの「スキュデリ嬢」が原作であり、「絨氈商人」もドイツの特異なメルヘン作家として知られるウイルヘルム・ハウフの作品を下敷きとしていることを作品の末尾で明記している。こうした事実は、黒石が早急に映画のための作品を求められていたことを示すものであろうし、より積極的に受け取ればドイツ文学からの選択は、映画「カリガリ博士」を念頭に置いての選択と考へて良いであろう。

それではなぜ長崎なのか？ 単純に考えれば、長崎が黒石の生まれ故郷であつたという理由が第一に挙げられる。黒石は、一八九三（明治二六）年一〇月二一日に長崎の八幡神社境内で生まれたとされている。父親はロシア人であり、黒石を生んだ後一週間ほどで亡くなった母親に代わつて、母方の祖母が彼を引き取つて育てた。黒石は、小学校三年まで長崎で過ごした後、ロシア・フランスなど世界を放浪することとなる。黒石の作品のうち自叙伝と銘うった作品は当然として、「黄夫人の手」のように長崎を登場させる作品は多い。このことは、生まれた土地へのこだわりと取れば簡

単である。しかも土地の問題だけでなく、異国人との血の関係も描かれる。「血と霊」では中国人の宝石細工師とその娘が登場し、その弟子の日本人青年が師匠の娘に恋をするという設定になっている。「血と霊」の原作である「スキュデリ嬢」に長崎が登場しないのは当然であるが、外国人が事件に関わるという設定も存在しない。そもそもホフマンの「スキュデリ嬢」は舞台をパリに求め、作品のヒロイン、スキュデリ嬢は、実在の人物マドレーヌ・ドゥ・スキュデリ（一六〇七〜一七〇一）がモデルであるとされている。彼女は冒険長編小説で知られた作家であり、ルイ十四世にたいへん厚遇されたという。ヴォルテールの「ルイ一四世の世紀」にもその名が見える。ホフマンはこの作品を書いたために様々な参考書を使用したらしいが、それは一七世紀のパリの上流社会を再現するためであった。つまり「スキュデリ嬢」の執筆動機に外国の風俗への興味が含まれていたことは確かではあるが、黒石はこうした原作のもつ要素をずらしながら、日本と中国との二つの国と人間をめぐる話として「血と霊」を書き上げたのである。となると作中では中国人と日本人となっているが、ロシア人の父と日本人の母の間に生まれた黒石における「血」の意識がそこに重ねられていると考えることは十分可能であろう。しかも宝石細工師鳳雲泰の犯罪は、宝石に異常な執着を示した母親から受け継いだものとされている。母の死後、中国から長崎に渡ってきた鳳雲泰は、この遺伝によって猟奇的な犯罪を長崎を舞台に繰り広げるのである。

同様の設定は、旧作の中から作品集に再録された「黄夫人の手」にも見られる。「黄夫人の手」の舞台は、長崎の新地街、現在中華街として知られる場所である。黒石は、「明治維新頃から渡来した幾千の支那人が集まって、大きな一つの廓を拵えている。その廓へ一足踏み入れると、遠い支那という国に行ったような気持がする程の別世界なのです」と書いている。このように長崎という街は、もともと自らの身体の中に異国を抱え込んでいる街なのである。そうした長崎の街を背景に、中国人の少年とその母親をめぐる怪異譚を日本人の少年の目から眺めて描いていく。その怪異とは、

中国で盗みの罪のために切り離された手が、その罪を発覚させた親類の男を追って日本までやってくるといふものであるが、ここには母子の関係や中国と日本という遠く隔たった土地が怪異を通じて結びつくなど「血と霊」と共通するテーマが見られる。「スキュデリ嬢」から「血と霊」への翻案を考えると—— 現実に黒石がどれほど意識していたかは別として——「黄夫人の手」は参照すべき作品として位置づけられる。

これに長崎の眼鏡橋を秘密の呼び出し場所として代理殺人が実行される「絨氈商人」が加わる。ここでも犯罪を長崎にもたらすのは外国人である。病気で死んだ妹の首を国に持ち帰りたいので切り離して欲しいという依頼を受けた男が首にメスを入れたところ、それは死体ではなく眠らされた女だった。依頼したのはトルコ人の貴族であり、女はその元恋人であった。しかし殺人の動機は情痴ではなく、貴族としての尊厳からであると彼は説明する。つまりこのトルコ人は恋人を若い役者に奪われただけでなく、その家に伝わる「紅いろの外套」も持ち去られたのである。この外套は、トルコ王即位のときの記念の品で、貴族の家の主人の記しであるという。彼はその外套を持ち去られただけでなく、それを買戻した際に元恋人に未練があるかのように侮辱されたことで殺人を敢行したのであった。つまり外套を取り戻した時点で本来はおさまるべきことが、貴族としての尊厳を侮辱されたことによって代理殺人にいたるのである。

「血と霊」や「黄夫人の手」の母子関係とは異なるものの、やはり血の問題——貴族の血をひくという誇りが、不必要に思える殺人を導くこととなる。そうした血の物語の舞台として黒石は、新地街や眼鏡橋といった長崎でも良く知られているポイントを利用しているのである。そしてその「血」といえば、日本人の血に留まらない複雑な血の物語であり、それらが行き交う場所として長崎は恰好の舞台を用意していることは確かである。

黒石の作品における「血」と「地」土地の問題、それを黒石の出自にフィードバックして理解していくことは実に容易である。しかしもともと長崎は、外国人の出入りが頻繁で犯罪の巢窟としてのイメージを投影しやすい場所である。犯罪の舞台としての長崎という場所の持つイメージは、作家の存在を超えて拡がっている問題でもある。そうしたイメージを長崎が獲得していくのはいつ頃のことなのか？ それはそれで魅力的なテーマだ。それに対する明確な答えは現在持ち合わせてはいないが、長崎という場所が犯罪と結びついていくイメージはかなり前からあったに違いない。

例えば、「血と霊」に先立って長崎を犯罪の行われる場所として取り上げた作品として佐藤春夫の「指紋」(中央公論臨時増刊 一九一八・七)を挙げることができる。外国(ロンドン)で阿片中毒となって帰国した男が、禁断症状に苦しんで駆け込んだ長崎の阿片窟で殺人事件に巻き込まれるという話である。「指紋」は犯人の特定に映画が使われているなど、いろいろ興味深い作品なのだが、アメリカの映画がそれほど時を経ずに日本で上映されるという同時性や、長崎の阿片窟に出入りしていた男が映画俳優になっているといった流動性など、メディアの流通のスピードと長崎という街の国際性がなければ求め得ない設定であろう。そしてそうした設定の中では、犯罪は常に外から持ち込まれたものということになる。「血と霊」「黄夫人の手」は中国大陸から日本に移り住んだ中国人とともに、「絨氈商人」では旅役者とともに……。再度確認しておけば、翻案作品ではこれらは原作にない要素である。これらは犯罪の素因を外部に押し付けると同時に、外国への抜き差し難い好奇心を示してもいる。その意味で中国人を登場させた黒石の「血と霊」「黄夫人の手」の二作は当時の「支那趣味」につながる作品でもある。佐藤春夫をはじめ、谷崎潤一郎や芥川龍之介といった当時の流行作家たちが、好んで中国を作品の題材に取り上げ、また自ら中国や台湾を巡る旅に出かけていったことは

良く知られている。黒石がみずからの出自に関わるロシアと日本ではなく、中国と日本を取り上げている点は、怪異譚を中国と結び付ける当時の支那趣味の一隅をこれらの作品が占めていることを示している。時間的には後のこととなるが、黒石と同様「中央公論」の説苑欄から作家への道を歩み出した村松梢風が、上海に渡るのは一九二三年のことである。そのルポ「魔都」(一九二四)と長編小説「上海」(一九二七)が魔都のイメージを上海に植えつけたのは良く知られている。

本題に戻れば、黒石の作品における舞台としての長崎や作中への中国人の登場は、時代の要請に沿ったものであったともいえる。その上で、長崎で生まれ育った黒石の経歴は、そうした要請に応えるものとして読者を獲得していくわけである。時代にマッチした作家として黒石を登場させたこの事実は、その後の黒石の沈黙にも関わっていくと思われるが、その問題をここでは長崎をめぐる交友圏に黒石が入っていく様子によって追ってみたい。

「血と霊」との関連で注目されるのは、一九二二年三月と一九二三年四月に、黒石が帰省をかねて長崎を訪ねていることである。特に後者は「血と霊」執筆の直前ということもあり注目されるだろう。もちろん自ら生まれ育った長崎を舞台として取り入れるために、改めて取材という必要もないであろうから、帰省によって作品が大きく変わったという事は考えられない。この二回の帰省に何らかの意味があったら、それは黒石が新進作家として認められてからの帰省だということである。日本で、そして世界で放浪を続けた黒石は、「中央公論」に作品を発表することで作家として故郷に錦を飾ったわけである。実際、一九二二年の帰省の際には、門司をはじめとして五箇所で講演を行ってから長崎入りしたらしい。コスモポリタンを自ら標榜してはいても、故郷の人から見れば黒石は長崎出身の文学者の一人であることは間違いなかった。当然帰れば講演を頼まれたり、会に出席したりということになる。さらに翌一九二三年の帰省には辻潤が一緒であった。この時は博多での講演を黒石がすっぱかすなどの騒ぎがあったことを辻潤の「陀々羅行

脚」(一九二四)は伝えている。

ところで、この二回にわたる長崎訪問の時、黒石は永見徳太郎という人物の家を訪問している。永見徳太郎の名は、今日、文学事典の類でも全く触れられていないか僅かのスペースしか与えられていない。しかし、長崎の商家に生まれ、彼は、自ら創作の筆も取るかたわら、長崎の歴史や九州に伝わる切支丹の事蹟などにも広く関心をもった人物として知られ、長崎を訪れる文学者が必ずといっていいほど永見宅を訪れていた。そうした交流の中から生まれたのが長与善郎の「青銅の基督」であり、芥川龍之介のキリシタンものなどである。つまり、永見徳太郎は長崎の紹介者であり、南蛮趣味を文壇に広めた張本人でもある。芥川の小品「黒衣聖母」の「稲見」は永見をモデルにしたものだが、その芥川が永見宅を最初に訪れたのは一九一九年の五月のことであり、一九二二年の五月に再遊している。つまり芥川の二度目の訪問は、黒石が永見家を訪れた翌月ということになる。黒石の永見家訪問は、こうした交友圏への登録を意味するだろう。いわばロシア人の父親から見捨てられた孤児である黒石が、永見徳太郎を通じてブルジョワ知識人の交友圏に自らの位置を見出すのである。しかも芥川龍之介のような流行作家と並んで、永見は文学者たちを歓待しつつ、彼らの原稿や書画の収集家でもあったが、芥川に原稿を所望したのと同じく、黒石の原稿や筆跡を求めてもいる。永見家では長崎出身の作家として黒石は歓迎されたであろうことは推測できる。一九二〇年から数年間を黒石のピークとみなすと、まさに絶頂にあった時期での長崎帰省であり永見家訪問であった。このように永見の交友圏を通して見ると、長崎は単なる一地方都市ではなく、中央の文壇の縮図であり、芥川のキリシタンものをはじめ小説の題材からみてもっともホットなスポットとして存在したと言つてよい場所であった。したがって、黒石が「血と霊」に長崎を舞台として取り入れることは、単に出身地を舞台にしたという以上にアピールする事柄であったように思える。

しかも、映画「血と霊」は、黒石と永見徳太郎の間にちよつとした因縁をもたらす。それは何かというと、映画「血

と霊」に鳳雲泰の娘娃^{あし}絲^し役で出演することとなる酒井米子が、かつて永見徳太郎の妾であったという事実である。新劇女優として注目されながら、松井須磨子の嫉妬から芸術座を退団して生活のため芸者になった米子を落籍したのが永見であった。永見と別れて上京した後、米子は松竹の映画女優になっていた。一九二二年から二三年にかけて日活向島は、改革のため女優陣を採用し、脚本部を充実させていくが、米子を松竹から引き抜き、黒石を脚本部に招いたのはこの一連の改革の流れの中でのことである。そして米子の「血と霊」出演ということとなる。長崎で籠の鳥となった経験を持つ米子が、その長崎の街を舞台とした映画で父親によって恋人牛島秀夫との仲を裂かれる役をするというのも因縁である。秀夫と会うことを禁じられた娃絲^{あし}役の米子が自室の窓辺でたえずスチール写真が残されているが、それはかつて永見に囲われていた米子を彷彿とさせる。もちろん黒石が永見宅を訪問した一九二三年には、すでに米子と永見は別れた後である。しかし、震災後の話になるが、永見は自分の戯曲を映画化してもらうために原稿を米子に託したとも伝えられるから、別れた後も連絡はあったのだろう。したがって帰郷の際に永見と黒石の間で映画を巡る話題が出たことは十分考えられるのである。その時長崎を舞台として中国人を登場させるアイデアが話されたかどうかは不明であるが、こうした交流圏を元に考えると「血と霊」はまさに当時の主流に棹さしていた作品と言って良いだろう。

単行本『血と霊』の新聞広告の惹句は、「霊の生活は血の中にあり」という聖書からの引用で始まっていた。「血と霊」以下の作品が血の問題を取り上げていたことはすでに触れた。「血と霊」では宝石細工師鳳の犯した連続殺人は、宝石に異様な執着を示した母からの遺伝として説明されている。詳しく述べれば、宝石——取り分け紅い宝玉に取り

憑かれた鳳の母は、常に新しい宝石を身近に置かなくては満足できなくなる。最初は夫が買い与えていたが、やがて盗みを働くようになり、法議官をしていた夫は彼女の盜癖を知って妻を殺してしまふ。その後母の残した宝石をもとに商売を始めた鳳であったが、母の死んだ年と同じ四三歳になって宝石への執着があらわれ、客に売った宝石を取り戻すために殺人を犯すようになったという。

この殺人の要因について原作の「スキュデリ嬢」ではさらに劇的に描かれている。懐妊中の母親が、貴族の男の宝石の首飾りに心を奪われてその男に近づく。男に抱き寄せられた母が宝石に手を掛けたとたん不思議にも男は脳卒中か何かで急死してまい、死体に抱かれたままの状態から助け出された母は恐怖のため重い病気になったという。その後母親の病気は治り、子供も無事産まれるが、胎児の時に母親が経験した恐怖が、生まれてきた子供の犯罪に結びついたとされている。親の血に流れている性質が血を通して遺伝するだけでなく、妊娠時の母親の経験や感情が胎児に影響するのだという。ヤン・ボンデソン『陳列棚のフリークス』（青土社 一九九八・一〇）は、これらを「胎内感応」という言葉であらわしているが、類似の信仰は古代にまで遡る事が出来るという。例えば、高貴な白人女性が黒人の子を生んで不義密通の罪をきせられたとき、それは妊娠中に寝室に飾ってあったムーア人を描いた絵画を見たためにおこった「胎内感応」であるとヒポクラテスが弁護したエピソードが紹介されている。文学作品においてもシェイクスピア（特に「ヘンリー六世」）をはじめ、散文では夏目漱石の「三四郎」に名前が見える女性作家アフラ・ベーンの「啞の乙女」、あるいは想像の力」が英語圏ではもつとも古いという。他にもフィールディング、スコット、デイケンズなど著名な作家の名前が挙がっている。母胎の中とはいえずに独立した生を歩み始めている胎児が母親の精神状態から影響を受けるといふのは今日では信じ難い。しかし、異常な執着心や犯罪が遺伝するかどうかはともかくとして、胎児に音楽を聴かせたり、言葉で話しかけたりする胎教が発育に好影響を与えるという話は今でも話題になる。つまり「胎内感応」の物語

はいまだ消滅していないのである。

ヤン・ボンデソンがその著書で挙げている名前の中で、注目したいのはストリンドベリである。ボンデソンによると、ストリンドベリは、精神の変調もあって感応遺伝に引き付けられたようだ。彼はダーウインの「飼育栽培下における動物の変異」から仕入れたのであろう、一度縞馬と掛け合わせられた雌馬は、以後どんな種馬と掛け合わせようと縞の仔を産むという話を「父」(第二幕)の中の台詞に使っている。さらに精液を通じて夫の肉体的特徴が妻に移るといふ話を聞いて恐れを感じていたらしい。自らの才能が外部へ流れ出してしまうことを恐れたのである。そのストリンドベリの言葉を引用しているのが「血と霊」であった。「血と霊」の広告文の「霊の生活は血の中にあり」という旧約聖書の引用は、実はストリンドベリからの再引用なのである。原作の小説では結末部分——物語の枠の外で聞き手である「私」によって語られているが、映画ではプロローグとして次のような文章で冒頭に映し出されていたという。

「霊の生活は血の中にあり」と旧約聖書にあるが、血の中には恐らくある種の神秘が潜んでいる。しかしそれは一切の正餐礼が不可解であるやうに、私たちの智慧や判断ではとても解釈のできないものである。

黒石は、ホフマンの小説を原作に用いながら、このストリンドベリの言葉に自らのモチーフを託したと言える。まさに鳳雲泰の血の中には母親の靈魂が宿っていたのである。そして弟子の秀夫が娘と結婚することを認めなかったのは、自分の血が孫に伝わるのを恐れたからであった。同様に「黄夫人の手」でも、母親である黄夫人は自らの窃盜癖が子供に伝わるのを恐れていた。小説「血と霊」の物語の聞き手は、ストリンドベリの言葉を通して鳳雲泰の犯罪の物語を受け入れようとする。ここでも明治末から大正にかけてが、日本におけるストリンドベリ・ブームの時代であったことが思い出される。大正の末には新潮社と岩波書店の二つの出版社から全集が刊行されるなど、その紹介は活発であった。ストリンドベリに影響を受けたという作家も多いが、その中に再び芥川龍之介の名を見出すことができる。芥川は、高

等学校卒業前後にストリンドベリを愛読したほか、その晩年——自殺直前の時期に傾倒を深めた⁵⁾。特に「齒車」(一九二七)で幻覚など神経症的な症状を取り上げ、「点鬼簿」(一九二六)「或阿呆の一生」(一九二七)で母親の狂気のことを書き記したのが注目される。なぜ芥川は、この時期にこうした告白に至ったのであろうか？ 田口律男の「芥川文学に於ける狂気とモダニズム」(『日本近代文学』五七集 一九九七・一〇)は、芥川における狂気の問題を当時の言説の中から浮かび上がらせているが、氏の論じるようにこれを文学上の戦略としても考えるべきであろう。その中で田口は当時注目された森田療法に触れている。森田療法の提唱者・森田正馬は、神経症の根本原因を遺伝によるものとする。その中には妊娠時の母親の身体的・精神的状態も含まれている。そもそも森田正馬はフロイトのように発病の因子に性欲を置くのではなく、恐怖など人間の感動を病因に置く。そうした状態が妊娠中に起これば当然胎児に影響するわけだ——つまり胎内感応もありえるわけである。森田の主張する「あるがまま」を受け入れる療法は、東洋的な思考を取り入れたすぐれた療法として現在も受け継がれているが、さすがにこの胎内感応を取り上げる論者はいない。

このようにみると、「血と霊」の物語は、長崎という設定や血の物語において時代の刻印を深く刻まれながら存在していると考えられる。それは「中央公論」の「説苑」欄から「創作」欄に這い上がってきた大泉黒石と、「創作」欄の常連芥川龍之介や佐藤春夫との間に共通するモチーフでもあった。そのことはまた、読物作家と純文学作家の間での勢力争いをも生み出していくのである⁷⁾。

注

(1) 本稿は、「分身と憑依——大泉黒石の『血と霊』——」(『湘南国際女子短期大学紀要』一九九九・二)に続くものである。

(2) 吉田六郎『ホフマン全集』解説。ヴォルテール『ルイ一四世の世紀』(岩波文庫)の人名録には、「ルイ十四世は彼女に年金を与え、厚遇した」とある。

(3) 永見徳太郎と文学者の交流については、大谷利彦『長崎南蛮余情 永見徳太郎の生涯』(長崎文献社 一九八八・七)『続長崎南蛮余情 永見徳太郎の生涯』(長崎文献社 一九九〇・一〇)の二著が詳しい。また芥川龍之介との交流については、志村有弘が「芥川周辺の作家」(笠間書院 一九七五・四)の中で触れている。

(4) 『ストリンドベルク小説全集』全5巻(新潮社 一九二三〜二五)『ストリンドベルク戯曲全集』全5巻(第一巻未刊 新潮社一九二三〜二六)『ストリンドベルク全集』1〜8巻(岩波書店 一九二四〜一九二七)。

(5) 森本修「芥川龍之介におけるストリンドベリイ」(「立命館文学」 一九五七・一〇)。

(6) 最近のものに、岩井寛『森田療法』講談社現代新書(一九八六・八)、大原健士郎『神経質性格、その正常と異常 森田療法の科学』(講談社 一九九七・九)などがある。

(7) 村松梢風の子息である村松暎「筆誅」(「中央公論」 一九七〇・一二)には、梢風や黒石など「中央公論」の説苑欄の作家が創作欄に進出することを、佐藤春夫や芥川龍之介が阻止しようとしたいきさつが書かれている。